

少子化問題対策を横断的組織編成の皮切りに

回転寿司店で高校生同士グループと遭遇

先日昼飯時に「たまには回転寿司に行ってみようか」ということになって夫婦そろって近くの回転寿司店の客となりました。夫婦が対座の形で指定されたテーブル席に着いて気が付いてみると、つい隣の席に、明らかに学校帰りと思われる高校生の女子グループが6名、そしてその隣りには男子グループが6名、いずれも場慣れした感じで座しているではありませんか。えーっ！高校生同士で回転寿司に出入りするようになったのかよ！俺たちの高校時代、いや、大学時代にも絶対になかったよ、こんなの。まあ、回転寿司自体が1958年(昭和33年)、東大阪市の元禄産業が元祖廻る寿司の1号店として開店したのが始まりで、全国津々浦々まで広がったのはつい最近のことなので私たちが見たら浦島太郎のような気分になるというのも当たり前なのかもしれませんが。

ノン寿司アイテムを飲食して回転寿司店を交遊の場に

見るともなく見ていると、女子グループのオーダー手順のスムーズなこと。パネルを一緒に見合っただけでニコニコ話し合いながらタブレット端末のボタンを次々押していきます。「おー、この子たちはお店の常連客だったんだ！」、そう、学校の授業が午前中の場合には、いつもこのグループでこの回転寿司店に来ているのだということが一目瞭然でした。そして、オーダー専用レーンに載せて運ばれてきたオーダーの内容を見てまたビックリ。通路を隔てたこちら側では、老夫婦間で「ウナギ寿司なんて寿司の邪道だ」なんて議論しているのに、彼女たちがオーダーしたのは、邪道どころか寿司の字も結びつかないサイド・メニューやらデザート・ドリンクやらのノン寿司アイテムのオンパレードだったからです。同世代の友人から「回転寿司店のラーメンやうどんもなかなか美味しいよ」という話は聞いたことがあるのですが、私たちから見たら孫娘の世代は、全く寿司と関係のないアイテムを飲食しながら回転寿司店を交遊の場として活用していたんですねえ。珍しく昼時に回転寿司店を訪れたお陰で、「いつの間にか創造されていた文化」に初めて遭遇したような気持ちがしました。

一人っ子でも幸せそうな回転寿司店交遊グループ

後ほど男子グループの方の卓上を見てみると、それぞれの席の前に1人当たり7-8枚ずつの寿司皿が重ねておかれていましたので、「ほほう、男子の方は日本の寿司の“伝統”を守ってくれているんだな」と思いましたが、更に「男女とも1回当たり1,000円程度の昼食代を賄われているのだな」と思うとともに、「ひょっとすると、この子たちは一人っ子で両親が共稼ぎしているのかな」と思えてきました。家に戻ってからインターネットを調べてみると、2002年以前は一人っ子の割合が10%未満ですが、2005年の統計から一人っ子の割合が右肩上がりに急増していて、現在では昔の「鍵っ子」という言葉がなくなるほど、もはやそれが当たり前という時代になっている」という表現が見つかりました。そうか、「一人っ子で良いのかなあ」とか「可哀想だなあ」と思っていたのですが、このように回転寿司店を交遊の場にすることができていたのか、これはこれで幸せなことじゃないかと思いました。

裏側に見える圧倒的多数の「可哀想な」境遇にある一人っ子

しかし一方で、一人っ子たちのみながみんな、このような交友の場を持つことができているのだろうか心配にもなりました。中には母親の務めと思ってワーキングマザーが作り置きしてくれていった昼食を摂りに自宅に帰って

いる一人っ子もいることでしょう。また、共稼ぎ所帯だから一人っ子所帯になるというわけではありませんから、専業主婦型のお母さんと昼食をともにしている一人っ子もいるに違いありません。ひょっとすると、目の前にいる「一人っ子でも幸せそうな回転寿司店交遊グループ」は実は一人っ子のほんの一部であって、この裏側には圧倒的多数の「可哀想な」境遇にある一人っ子がいるのではないかと思えてきました。いずれにしても、社会に出て「人間」となる前の「人」の段階にあつて、仲良しであれ喧嘩仲間であれ、お互いの間の意思疎通をすることによって、格好のコミュニケーション技能を身に付けるために役立つ兄弟姉妹がいない一人っ子は「可哀想な」境遇にあるに違いないと思え、改めて、自分自身にしても自分の子供達にしても「一人っ子だったらどんなに“可哀想な”家庭生活を送っていただろうか」という思いがしてきました。

EQ(情緒指数:Emotional Quotient)上のバカの壁を乗り越えにくい一人っ子

そして、そんな思いに強烈にかぶってきたのが、「日本では若年層の自殺率が高い」という情報でした。若年層の死因順位をみると第1位は自殺となっており、15~34歳の若い世代で死因の第1位が自殺となっているのは、先進国(G7)では日本のみであり、その死亡率も他の国に比べて高いものとなっているとのこと。2003年に養老孟司先生が「バカの壁」を出版された時に私は人間の能力を、IQ(知能指数:Intelligence Quotient)を縦軸、EQ(情緒指数:Emotional Quotient)を横軸とする4象限事象としてとらえ、養老先生がひたすら意識されている「IQ上のバカの壁」とは別に「EQ上のバカの壁の突破が重要」と謳った一文をホームページ上に記しています(「馬鹿論」再考 <http://h-sasaki.net/Bakaronsaikou.htm>)。IQは「人」の能力尺度ですがEQはコミュニケーション能力を基幹とする「人間」の能力の指標です。社会に出て「人間」となる前の「人」の段階にあつて、コミュニケーション技能を身に付けるために役立つ兄弟姉妹がいない一人っ子はEQの育成に障害があり、「人間」社会に適用できず、歳若くして自分で自分の命を絶つことになるのではないかと今にして思えるような気がしています。

少子化問題対策を横断的組織編成の皮切りに

2007年の第一次安倍内閣の時に指名された上川陽子さんをはじめ現在の岸田内閣の野田聖子さんまで、20人に及ぶ少子化担当大臣が選定されてきました。何も権限が与えられていないので、もし私だったら(とても現実味のない仮定表現ですが)「少子化担当大臣ご指名は有り難く返上させていただきます」とお断りするところですが、それでも歴代の少子化担当大臣が誕生し続けているところを見ると、それだけ「大臣」になりたがる代議士先生が多いということなのでしょうね。実際にどんな少子化対策が決定され実行されてきたのか全く分からず、呼び方もいつの間にか当初の「少子化対策担当大臣」が、自らが少子化を推進するような「少子化担当大臣」に落ち着いてしまっています。実際に、様々な少子化問題が起こっており政府としての対策立案推進が必要なのですが、人気取りの大臣指名しか行われていないのですから情けない限りです。ここでも、“縦から横に”の発想で、文部科学省、厚生労働省、財務省などの関係縦割り諸官庁の官僚を常駐させた横断的組織(あるいはプロジェクトチームでも良い)を編成して政治家が大臣(またはプロジェクトリーダー)を務める体制をとり、少しは「内閣が行政府である」ところを示してほしいものだと思います。きっと、私が遭遇した高校生同士グループの回転寿司店での交遊なども少子化問題解決のための1ヒントとして取り上げられることとなると思います。縦断的な問題の処理の処理を積み重ねてきている縦断的な官庁の管理は、問題解決のための情報が集中するそれぞれの事務次官に委ねればよいことであつて、屋上に屋を重ねる形で代議士先生を大臣に据える必要はありません。現今の新型コロナウイルス案件も含め、今後一層複合的な問題のウェイトが高まっていくものと思われます。代議士先生が、関係縦割り諸官庁の官僚を常駐させた横断的組織の大臣またはリーダーとして権限を行使する形ができてこそ「議院内閣制」ではないかと思っていたのですが、第2次岸田内閣で旧態依然とした大臣指名がされていました、やれやれ。

(完)